

県立多治見病院 緩和ケアチーム通信

2025年11月号 vol. 173

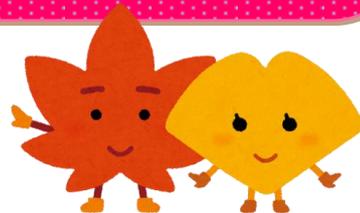
緩和ケアチームメールアドレス: kanwa@tajimi-hospital.jp

自施設での緩和ケアに関する悩みごと、県病院緩和ケアチームに対する意見や要望、施設ごとでのオンライン事例検討や勉強会などの開催要望など、なんでもお寄せ下さい。



～ チームメンバーより一言 ～

消化器内科 医師・蓑輪 彬久



緩和ケアチーム、消化器内科の蓑輪です。私事ではございますが40歳、不惑の年となりました。何かと無理がきかなくなり特に夜間の呼び出しなどがあるとその後の勤務にかなり響くようになってきた今日この頃です。医師の夜間勤務には2種類あって当直とオンコール(呼び出し待機)とあります。救急病院だとこの当直は不眠の勤務となることも多く、当直後は可能な限り朝か午前中で帰宅するのが推奨されるようになったのが最近の働き方改革です。一方、オンコールのほうは救急などの呼び出しがあって手術・処置・入院などの対応があっても翌日は通常勤務でこれがなかなかきついのが現状です。医師も人間ですのでまず自身の健康があってこそ適切な医療が提供できますので、そろそろ健康と家庭を意識した働き方を考えている不惑の年でございます。私見になりますが医療費削減が議論になる昨今、さらに大半の病院が赤字経営になるなかでおそらく夜間時間外に救急対応や緊急の処置・手術などができる病院は確実に減ってくると思います。急病は時間を問わず発生するものでそれに対応するのが救急医療です。そこには寝ずに対応している生身の医療スタッフがいることをわかっていただいたうえで今後の医療が良い方向に変わっていくことを願っています。

November

がん化学療法看護認定看護師・渡辺 順子

10月に横浜で開催された癌治療学会に参加してきました。学会テーマは「がんと生きる、がんを生きる」で、患者や社会のがんに対する向き合い方の変化・・・など興味深く聴くことができました。

今回は特別講演でタレントの堀ちえみさん(2019年ステージ4の舌がんであることを公表)の講演があり、最初はミーハー心で一目見たい!と参加しましたが、病気の診断がつくまでの苦悩や治療を決意するまでの葛藤など、家族とのエピソードを交えながらお話しして下さい、今回の学会で一番印象に残る講演になりました。舌がん診断後、医師からは舌を大きく切り取る手術を提案されたそうですが、診断までの経過が長く、病気がわかった時にはかなり痛みも出て心身ともに疲れていた堀さんは積極的治療を選ばず緩和的な医療を選択しようとしたそうです。しかし、当時16歳だった娘さんの「私まだ16歳だよ、まだお母さんと16年しか一緒にいないんだよ!しゃべれなくなっても話聞いてくれるだけでもいいから、お願いもっと側にいてよ」の言葉で治療を決意した・・・とお話しされ、同年代の子供を持つ自分と照らし合わせ、思わず涙が溢れてきました。

約1時間、カンペも見ずに自分の言葉でゆっくりとお話をされる姿は、本当に輝いてキラキラしていました。術後で、舌も思うように動かさずしゃべりにくそうな姿もありましたが、以前テレビで拝見した時よりも活舌良く、声も大きく、はっきりと話しており、術後のリハビリの大変さを想像し、また涙が溢れてきました。

がん罹患した患者さん一人一人にそれぞれの物語があり、病気と共存しつつ強く生きている・・・それを実感できる3日間になりました。

